

## 熊本大学学術リポジトリ

## Kumamoto University Repository System

Title	龍南甦生の一路：部報
Author(s)	小林，幹夫
Citation	龍南， 2 2 9： 1 1 2 - 1 1 4
Issue date	1934-11-25
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/7232">http://hdl.handle.net/2298/7232</a>
Right	

## 部 報

## 龍南甦生の一路

總務 小林幹夫

吾人は今夏龍南會各部の遠征に際し、其の戦地に於ける意氣戦狀を見、相共に起居して意義の存する所を知り、且つ又激勵の任に當らんが爲、七月中旬東上の途に就いたのである。今暫く其の視察を根底として、簡単に各部に批評を加へて見たいと思ふ。勿論淺薄なる觀察にして、的確を缺く所多しと信するも、龍南諸子の寛恕を乞ふ次第である。

先づ福岡に到着して、庭球部の第一回戦に敗退せるを知つた。該部は沈滞の期既に久しく、今や決然として新生面を開拓するの急務を持つ。今後一層の猛練習に加ふるに、

須く五高魂の練成に留心すべきである。

霸氣練習の點に於て柔道部は略完全なりと思考する。九大の優勝戦に於て僅かに敗れたりと雖ども、平素の苦業の遺憾なく發揮されたるを見た。体格の他校に比して著しく劣るは残念であり、唯柔道部諸子の猛練習に期待する所以である。

野球部は熱心さが足りぬ。戦地合宿に於ては尙數倍の自重緊張が必要である。我等龍南人の生命は意氣であり熱情である。今にして野球部の革正を計らざれば、吾人は後來憂ふべき現象あるを恐れるものである。

京都に於ては、弓道部の練習十分に於て、射技の卓越せるを認めた。偶々不意の障礙に遭遇し、優勝の機會を逸したが、以後益々健闘して五高弓道部の眞價を發揮し、再び深紅の優勝弓を擁して關門を渡る日を鶴首して待望する。榮ある傳統を有する劍道部は、戦蹟十分ならずと雖も、銳意奮闘して龍南人の意氣を大に發揚した。今後技法の熟練に努力を傾注し、先人の偉業に恥ぢざる様奮勵すべきである。

排球部は其の技未だ巧ならざるも、熱血迸る青年の意氣と、五高生たる高き矜持とを有してゐる。就中戰鬥精神の旺盛さは激賞に値する。自今技術の向上に心血を注げば、全國制覇の日も遠からずと信ずる。吾人は新興の部として排球部に最も屬目するものである。

掌肉權に點する端艇部の大津市に於ける力闘は之を認むるも、在熊中の練習に不足せるを否み難い。合宿の便惡しきに依るとしても今一層の努力を望む。尙部員間の意志の疎通を計る事も亦緊要である。

更に水泳部を視察しては、昔日剛健の意氣の既に乏しきを感じた。合宿氣分の軟弱化、戰鬥精神の消磨は實に悲しむべき現象である。水泳部傳統確保の爲、只管に部員諸子の覺醒反省を求む。

陸上競技部は練習の不足と覇氣の缺乏とに依り明治神宮外苑に於て大敗した。今や競技部は此の敗颯を一轉機として、死力を盡して練習に奮進し、意氣を新にして、龍南の名譽の爲に雪辱の義務を果すべきである。

籠球部とは往路を共にしたが、遂に試合參觀の機會を得なかつた。然し乍ら其の技秀でず戰蹟も芳しからざるを知

る。幸ひ部員諸子の体中に汪流する三四郎の熱血を、適度適處に發揚して、平素の練習に精魂を打込み向上の一路に邁進すべきである。

馬術部は可成りの成績を収めたりと聞く。

斯くて各部の遠征は總じて不成績の内に終つた。外部より我等龍南人に對する期待は、實に諸子の想像を絶するものがある。天下の高校を代表するものと自他共に許し又誇稱する龍南現在の狀勢を見て、諸子又反省する所無きか。來る年毎に香り高きオリブの下、本館前の蘇鐵群に榮ある優勝旗を圍み、徹宵痛飲淋漓として、凱歌高らかに勝利の美酒に酔へる追憶は又一朝の夢と化し去るのであらうか。龍南人特に部員諸子の奮起を望んで止まぬ次第である。

尙上京中先輩後藤内務大臣、山崎農林大臣を訪問し龍南會を代表して祝意を表して來たが、兩相共に多忙を極められ、遺憾乍ら十分懇談するを得なかつた。

次に年來の懸案たりし寮歌レコード吹込の交渉は、漸く夏季休暇に入つてコロンビア蓄音器會社と成立し、陸上競技部の好意により不十分乍ら遂行した。指揮には先輩にし

て音楽家たる紙恭輔氏が當られ全く好都合だつた。

以上を以て東上視察の報告を終り、次で龍南の誕生の一路に就いて言及したい。

現在の龍南會各部は全く部員獲得難に悲鳴を上げてゐる。全國高校中第二位の生徒數を存し、光榮ある傳統を擁する我が五高が、斯くの如き問題に當面するのは誠に歎すべき事であらねばならぬ。龍南人の龍南會そのものに對する無關心と、利己的な自由主義と、各部の不振とが、現龍南不振の動因となつたものと考へられる。

而して以前一級四十名であつた定員が本年よりは三十名に減じ、二年後に於ては總員二百四十名の減少となり、部員獲得難は其の極に達し、龍南會を現狀の儘放置せしむる時は、恐るべき結果となるは自ら明かである。此處に於て現龍南の誕生を計る唯一の血路は、今や全部員制度を制定する以外には絶對に無いと吾人は信ずる。

幾度か中原に鹿を射止め、天下に雄名を轟かせたる光榮ある龍南の現在の衰狀を見よ。其の陣容の貧弱なるを見よ。諸子は特に龍南が偉大なる傳統に背き、一步一步頽廢の道を辿らんとするを默視するや。實に現龍南の革新は我等龍

南人の先輩に對する義務であり、後輩に對する責任であらねばならぬ。

一度び全龍南人を各部に分屬せしむるを得たならば、各部の殷賑隆盛は勿論、我等の自治團體たる龍南會に對する會員各自の認識を増し、その雰圍氣を淨化し、軟弱精神を拂拭して龍南會の向上を誘導し、更に個々の精神体格の練習に於ては將來雄飛の根底を造り、尙感激の部生活に青春の意氣を吐露するを得、光榮ある龍南の聖域は斯くして剛毅朴訥本來の道に邁進するを得るであらう。運動盛んなれば學業も亦興る。

吾人は今や衰頽し行かんとする龍南を前にして、其の誕生唯一の血路は全部員制度の確立にありと絶叫する。願はくば龍南人の誠心誠意もて、弊害なく而も完全に一日も早く此の制度の實現されん事を。終り

## 排 球 部 報

管 生

熱と意氣に燃ゆる排球隊員一同血と汗に彩どられて忍苦